

このワークは、算数文章題ができない子どもを対象として製作しました。ここでいう算数文章題とは、鶴亀算のような難解な問題ではなく、また、計算式を立てて解くような問題でもありません。3以下の数の増減を、頭の中でのイメージで解答する、初歩的な文章題です。障害の軽い子どもにとっては、もっと難しい文章題への橋渡しとしての意義もあるかと思いますが、このワークのいちばんの対象は、発達障害の強い子どもです。◆子どもによっては、「アメが3個ありました。1個食べました。アメは、いくつになりましたか？」のようなごく平易な問題が、学習を重ねても解答できる上限かも知れません。しかし、そのような子どもにも、文章題というものに触れ、取り組んでもらいたい、と考えます。その理由は、算数文章題には、算数という枠を超えて、社会の中で人と関わり合って生きて行くための大切な要素が詰まっているからです。◆例えば、算数文章題は、本文からの抜き書きでは解答のできない、純粋な読解問題です。解答するためには、まず、その文章題で描かれている状況について、人と共有できるイメージを持たなければなりません。また、状況変化に対する一般的な認識や予測(例:食べると減る)も求められます。そして、問題のそれぞれの文を、数の変化を軸としながら、因果関係を持たせて理解しなければなりません。それらの作業を支えるのは、コミュニケーションに通底する「常識」です。“算数文章題が解ける”ことは、常識を共有して他者や社会とつながることであります。このワークの目的は、「常識を育て、人と共生する力を高めて行くこと」にあります。



【文章題学習の基礎となる課題を配置】

* 問題Ⅰは「主題への気づき」、問題Ⅱは「状況の能動的な判断」、Ⅲは「数の増減操作」、Ⅳは、「文章題の文章構成への気づき」、Ⅴは、「文章からの増減のイメージ化」をテーマとしています。そして、最後のⅥで、それまでの課題を踏まえて、実際の算数文章題に取り組んでもらう構成になっています。

【数の増減がテーマ】

* 算数初期学習の内容で、数の増減のみをテーマとしています。順序数、大小、数の分割・合併・求差などについては触れていません。増減の状況変化を、読み取ることが目的です。

【取り扱う数量について】

* ワーク全体としては、1桁の数量を題材としています。しかし、状況変化の結果を解答する課題では、頭の中でのイメージ操作が可能な、3以内の数の増減を題材にしています。

【文章の記述形式】

* 問題Ⅳ以降の文章は、「3個食べると」、「もし、3個食べたら」のような仮定の形を使わず、あくまで、「リンゴが3個ありました。でも、1個食べました。」のような、出来事の記述の形で表現しています。その理由は、

- ① 仮定を表す重文(～と・～たら を使った文)に比べ、文法的に平易。
- ② 出来事の記述の形の方が、日常的な“経験の語り”に近く、イメージがしやすい、という点があげられます。

【増減の提示順序】

* 問題Ⅲ以降は、数の減少と増加を交互(もしくはペア)に配置しています。事態の変化を双方向的に捉えることが目的です。また、通常の文章題の提示順序とは異なり、増加より先に減少の問題を配置しています。ことばのテーブルで、問題Ⅳ:イメージ問題の解答状況を調べたところ、増加よりも減少の方がイメージしやすく、また、減少問題の後、増加問題に取り組んだ方が正答が得られやすい、という傾向がありました。今回は、試みとして、「減少先行」でワークを構成してみました。

ワークの特徴

☆より詳しい資料として、葛西ことばのテーブルHP内の学習会資料(第12回「算数文章題を考えるⅡ」、および、第7回「算数文章題を考えるⅠ」)を、ご参照いただければと思います。